

# 有島武郎集



現代日本文學全集

21



# 有島武郎 集

現代日本文學全集

21



筑摩書房版

有島武郎集

昭和二十九年四月十日 印刷

昭和二十九年四月十五日 發行

著者 有島武郎ありしま たけを

發行者 古田昆東京都文京區合町九

印刷者 山田一雄東京都青梅市根ヶ布三八五

發行所 筑摩書房東京都文京區合町九

電話 小石川(92) 五一・二〇五七  
振替 東京 一六五七六八

クロース 日本クロース工業株式會社  
印刷 株式會社 精興社  
製本 株式會社 矢島製本工場

有島武郎集 目次

|                    |           |
|--------------------|-----------|
| 或る女                | ..... 五   |
| <i>An Incident</i> | ..... 一〇九 |
| 宣言                 | ..... 一一一 |
| カインの末裔             | ..... 一二五 |
| 小さき者へ              | ..... 一二八 |
| 石にひしがれた雑草          | ..... 一六四 |
| 生れ出づる悩み            | ..... 一二四 |
| 酒 狂                | ..... 一四三 |
| 骨                  | ..... 一五〇 |
| ドモ又の死              | ..... 一五九 |

|             |     |
|-------------|-----|
| 惜みなく愛は奪ふ    | 三七〇 |
| 武者小路兄へ      | 四一五 |
| 宣言一つ        | 四二七 |
| 私有農場から共産農園へ | 四三〇 |
| 農場解放願末      | 四三三 |
| 有島武郎（伊藤 整）  | 四三六 |
| 解説          | 四三三 |
| 年譜          | 四三七 |

装幀 恩地孝四郎

有島武郎集



## 或る女

一

新橋を渡る時、發車を知らせる二番目の鈴が、霧とまではいへない九月の朝の、煙つた空氣に包まれて聞こえて來た。葉子は平氣でそれを聞いたが、車夫は宙を飛んだ。而して車が、鶴屋といふ町の角の宿屋を曲つて、いつでも人馬の群がるあの共同井戸のあたりを駈けぬける時、停車場の入口の大戸を閉めようとする驛夫と争ひながら、八分がた閉りかゝつた戸の所に突つ立つてこつちを見成つてゐる青年の姿を見た。

「まあおそくなつて濟みませんでした事……まだ間に合ひますか知ら」

と葉子が云ひながら階段を昇ると、青年は粗末な麥稈帽子を一寸脱いで、黙つたまゝ青い切符を渡した。

「おや何故一等になさなかつたの。さうしないといけない譯があるから代へて下さいましな」

と云はうとしたけれども、火がつくばかりに驛夫がせき立てるので、葉子は黙つたまゝ青年とならんで小刻みな足どりで、たつた一つだけ

開いてゐる改札口へと急いだ。改札はこの二人の乗客を苦々しげに見やりながら、左手を延して待つてゐた。二人かてん／＼に切符を出さうとする時、

「若奥様、これをお忘れになりました」

と云ひながら、羽被の紺の香の高くするさつきの車夫が、薄い大柄なセルの膝掛を肩にかけたまま、慌てたやうに追ひ駈けて來て、オリイッ色の絹ハンケチに包んだ小さな物を渡さうとした。

「早く／＼、早くしないと出つちまひますよ」改札が堪らなくなつて癪癪をふり立てた。

青年の前で「若奥様」と呼ばれたのと、改札が／＼怒鳴り立てたので、針のやうに鋭い神經はすぐ彼女をあまのじやくにした。葉子は今まで急ぎ氣味であつた歩みをびつたり止めてしまつて、落ち付いた顔で、車夫の方に向きなほつた。

「さう御苦勞よ。家に歸つたらね、今日は歸りが遅くなるかも知れませんが、お嬢さんたちだけで校友會にいらつしやいつてさう云つておくれ。それから横濱の近江屋——西洋小間物屋の近江屋が來たら、今日こつちから出かけたからつて云ふやうにつてね」

車夫はきよ／＼と改札と葉子とをかたみがおくろるやうに慌てゐた。改札の顔は段々險しくなつて、あはや通路を閉めてしまはうとした時、葉子はする／＼とその方に近よつて、

「どうも濟みませんでした事」といつて切符をさし出したが、改札の眼の先きで花が咲いたやうに微笑んで見せた。改札は馬鹿になつたやうな顔付をしながら、それでもおめ／＼と切符に孔を入れた。

プラットホームでは、驛員も見送人も、立つてゐる限りの人々は二人の方に眼を向けてゐた。それを全く氣付きもしないやうな物腰で、葉子は親しげに青年と肩を並べて、しづ／＼と歩きながら、車夫の屈けた包物の中には何があるか中ててみる／＼と、横濱のやうに自分の心を牽く町はないとか、切符を一緒にしまつておいてくれるとか云つて、音楽者のやうにデリケートなその指先で、わざとらしく幾度か青年の手に觸れる機會を求めた。列車の中からある限りの顔が二人を見迎へ送るので、青年が物慣れない處女のやうに羞かんで、而かも自分ながら自分を怒つてゐるのが葉子には面白く眺めやられた。

一番近い二等車の昇降口の所に立つてゐた車掌は右の手をポケットに突つ込んで、靴の爪先きで待ち遠しさうに敷石を蹴いてゐたが、葉子がデッキに足を踏み入れると、いきなり耳を劈くばかりに呼子を鳴らした。而して青年（青年は名を古藤といつた）が葉子に續いて飛び乗つた時には、機關車の應笛が前方で朝の町の賑やかなさいめきを破つて響き渡つた。

葉子は四角なガラスを嵌めた入口の繰戸を古藤が勢よく開けるのを待つて、中に這入らうと



して、八分通りつまつた兩側の乗客に稻妻のやうに鋭く眼を走らしたが、左側の中央近く新聞を見入つた、瘦せた中年の男に視線がとまると、はつと立ちすくむ程驚いた。然しその驚きは瞬く暇もない中に、顔からも脚からも消え失せて、葉子は思ひれもせず、取りすましもせず、自信ある女優が喜劇の舞臺にでも現はれるやうに、軽い微笑を右の頬だけに浮べながら、古藤に續いて入口に近い右側の空席に腰を下ろすと、あでやかに青年を見返りながら、小指を何んとも云へない好い形に折り曲げた左手で、鬢の後毛をかき撫でる序に、地味に装つて來た黒のリボンに觸つて見た。青年の前に座を取つてゐた四十三四の脂ぎつた商人體の男は、あたふたと立ち上つて自分の後ろのシェードを下ろして、折ふし横ざしに葉子に照りつける朝の光線を遮つた。

紺の飛白に書生下駄をつまかけた青年に對して、素性が知れぬほど顔にも姿にも複雑な表情を湛へたこの女性の對照は、幼い少女の注意をすら牽かずにはおかなかつた。乗客一同の視線は綾をなして二人の上に亂れ飛んだ。葉子は自分が青年の不思議な對照になつてゐるといふ感じを快く迎へてでもゐるやうに、青年に對して殊更親しげな態度を見せた。

品川を過ぎて短いトンネルを汽車が出ようとする時、葉子はきびしく自分を見据ふる眼を眉のあたりに感じて徐ろにその方を見かへつた。それは葉子が思つた通り、新聞に見入つてゐる

かの瘦せた男だつた。男の名は木部孤筈と云つた。葉子が車内に足を踏み入れた時、誰よりも先きに葉子に眼をつけたのはこの男であつたが、誰よりも先きに眼を外らしたのもこの男で、すぐ新聞を目八分にさし上げて、それに讀み入つて素知らぬふりをしたのに葉子は氣がついてゐた。而して葉子に對する乗客の好奇心が衰へ始めた頃になつて、彼は本氣に葉子を見詰め始めたのだ。葉子は豫めこの利那に對する態度を決めてゐたから慌ても騒ぎもしなかつた。眼を鈴のやうに大きく張つて、親しい媚びの色を浮べながら、黙つたまゝで軽く點頭かうと、少し肩と顔とをそつちにひねつて、心持ち上向き加減になつた時、稻妻のやうに彼女の心に響いたのは、男がその好意に應じて微笑みかはす様子のないと云ふ事だつた。實際男の一字半眉は深くひそんで、その兩眼は一際鋭さを増して見えた。それを見て取ると葉子の心の中はかゞとなつたが、笑みかまけた眸はそのまゝで、する／＼と男の顔を通り越して、左側の古藤の血氣のいゝ頬のあたりに落ちた。古藤は練戸のガラス越しに、切割りの蜷を眺めてつくねんとしてゐた。

「又何か考へていらつしやるのね」  
葉子は瘦せた木部にこれ見よがしと云ふ物腰で華やかに云つた。

古藤はあまりはずんだ葉子の聲にひかされて、まじりとその顔を見守つた。その青年の單純な明らさまな心に、自分の笑顔の奥の苦い澁い色が見抜かれはしないかと、葉子は思はずたじろいだ程だつた。

「何んにも考へてゐやしないが、蔭になつた蜷の色が、餘り綺麗だもんで……紫に見えるでせう。もう秋がかつて來たんですよ」  
青年は何も思つてゐはしなかつたのだ。

「本當にね」

葉子は單純に應じて、もう一度ちらつと木部を見た。瘦せた木部の眼は前と同じに鋭く輝いてゐた。葉子は正面に向き直ると共に、その男の眸の下で、惛鬱な險しい色を引きしめた口のあたりに漲らした。木部はそれを見て自分の態度を後悔すべき筈である。

## 二

葉子は木部が魂を打ちこんだ初戀の的だつた。それは丁度日清戰爭が終局を告げて、國民一般は誰れ彼れの差別なく、この戰爭に關係のあつた事柄や人物やに事實以上の好奇心をそゝられてゐた頃であつたが、木部は二十五といふ若い齡で、或る大新聞社の従軍記者になつて支那に渡り、月並みな通信文の多い中に、際立つて觀察の飛び離れた心力のゆらいだ文章を發表して、天才記者といふ名を博して目出度く凱旋したのであつた。その頃女流基督教徒の先覺者として、基督教婦人同盟の副會長をしてゐた葉子の母は、木部の屬してゐた新聞社の社長と親しい交際のあつた關係から、或る日その社の従軍記者を自宅に招いて慰勞の會食を催した。その席で、小柄で白皙で、詩吟の聲の悲壯な、感情の熱烈な

この少壯従軍記者は始めて葉子を見たのだつた。葉子はその時十九だつたが、既に幾人もの男に戀をし向けられて、その圍みを手際よく繰りぬけながら、自分の若い心を樂しませて行くタクトは十分に持つてゐた。十五の時に、袴を紐で締める代りに尾錠で締める工夫をして、一時女學生界の流行を風靡したのも彼女である。その紅い唇を吸はして首席を占めたんだと、嚴格で通つてゐる米國人の老校長に、思ひもよらぬ浮名を負はされたのも彼女である。上野の音楽學校に這入つてヴァイオリンの稽古を始めてから二ヶ月程の間にめき／＼上達して、教師や生徒の舌を捲かした時、ケーベル博士一人は濫い顔をした。而して或る日「お前の樂器は才で鳴るのだ。天才で鳴るのではない」と無愛想に云つて退けた。それを聞くと「さうで御座いますか」と無造作に云ひながら、ヴァイオリンを窓の外に抛りなげて、そのまま學校を退學してしまつたのも彼女である。基督教婦人同盟の事業に奔走し、社會では男勝りのしつかり者といふ評判を取り、家内では趣味の高い而して意志の弱い良人を全く無視して振舞つたその母の最も深い隠れた弱點を、拇指と食指との間にちやんと押へて、一步もひけを取らなかつたのも彼女である。葉子の眼には總ての人が、殊に男が底の底まで見すかせるやうだつた。葉子はそれまで多くの男を可なり近くまで潜り込ませて置いて、もう一步といふ所で突つ放した。戀の始めにはいつでも女性が祭り上げられてゐて、或る

機會を絶頂に男性が突然女性を踏み躪るといふ事を直覺のやうに知つてゐた葉子は、どの男に對しても、自分との關係の絶頂が何處にあるかを見ぬいてゐて、そこに來かゝると情容赦もなくその男を振り捨ててしまつた。さうして捨てられた多くの男は、葉子を恨みよりも自分達の獸性を恥ぢるやうに見えた。而して彼等は等しく葉子を見誤つてゐた事を悔いるやうに見えた。何故といふと、彼等は一人として葉子に對して怨恨を抱いたり、憤怒を漏したりするものはないから。而して少しひがんだ者達は自分の愚を認めるよりも葉子を年不相當にませた女と見る方が勝手だつたから。

それは戀によろしい若葉の六月の或る夕方だつた。日本橋の釘店にある葉子の家には七八人の若い従軍記者がまだ戦塵の抜けきらないやうな風をして集まつて來た。十九でゐながら十七にも十六にも見れば見られるやうな華奢な可憐な姿をした葉子が、慎しみの中にも才走つた面影を見せ、二人の妹と共に給仕に立つた。而して強ひられるまゝに、ケーベル博士から罵られたヴァイオリンの一手も奏でたりした。木部の全靈はたと一目でこの美しい才氣の漲り溢れた葉子の容姿に吸ひ込まれてしまつた。葉子も不思議にこの小柄な青年に興味を感じた。而して運命は不思議な惡戯をするものだ。木部はその性格ばかりでなく、容貌——骨細な、顔の造作の整つた、天才風に蒼白い滑らかな皮膚の、よく見ると他の部分の饒麗な割合に下顎骨の發

達した——まで何處か葉子のそれに似てゐたから、自意識の極度に強い葉子は、自分の姿を木部に見付け出したやうに思つて、一種の好奇心を挑發せられずにはゐなかつた。木部は燃え易い心に葉子を焼くやうにかき抱いて、葉子は又才走つた頭に木部の面影を軽く宿して、その一夜の饗宴はさりげなく終りを告げた。

木部の記者としての評判は破天荒といつてもよかつた。苟も文學を解するものは木部を知らないものはない。人々は木部が成熟した思想を提げて世の中に出て來る時の華々しさを矚し合つた。殊に日清戰役といふ、その當時の日本にしては絶大な背景を背負つてゐるので、この年少記者は或る人々からは英雄の一人とさへして崇拜された。この木部が度々葉子の家を訪れるやうになつた。その感傷的な、同時に何處か大望に燃え立つたやうなこの青年の活氣は、家中の人々の心を捕へないでは置かなかつた。殊に葉子の母が前から木部を知つてゐて、非常に有爲多望な青年だと讃めそやしたり、公衆の前で自分の子とも弟ともつかぬ態度で木部をもてあつたりするのを見ると、葉子は胸の中であつた笑つた。而して心を許して木部に好意を見せ始めた。木部の熱意が見る／＼抑へがたく募り出したのは勿論の事である。

かの六月の夜が過ぎてから程もなく木部と葉子とは戀といふ言葉で見られねばならぬやうな間柄になつてゐた。かう云ふ場合葉子がどれ程戀の場面を技巧化し藝術化するに巧みであつた

かは云ふに及ばない。木部は寝ても起きても夢の中にあるやうに見えた。二十五といふその頃まで、熱心な信者で、清教徒風の誇りを唯一の立場としてゐた木部がこの初戀に於てどれ程眞剣になつてゐたかは想像する事が出来る。葉子は思ひもかけず木部の火のやうな情熱に焼かれようとする自分を見出す事が出来た。

その中に二人の間柄はすぐ葉子の母に感づかれた。葉子に對して豫てから或る事では一種の敵意を持つてさへゐるやうに見えるその母が、この事件に對して嫉妬とも思はれる程嚴重な故障を持ち出したのは、不思議でないと思ふべき境を通り越してゐた。世故に慣れ切つて、落ち付き拂つた中年の婦人が、心の底の動搖に刺戟されてたくらみ出すと見える殘虐な譚計は、年若い二人の急所をそろ／＼と窺ひよつて、陽も通れと突き刺してくる。それを拂ひかねて木部が命限りに藻掻くのを見ると、葉子の心に純粹な同情と、男に對する無條件な捨身な態度が生れ始めた。葉子は自分で造り出した自分の罪に他愛もなく酔ひ始めた。葉子はこんな眼もくらむやうな暗い／＼しいものを見た事がなかつた。女の本能が生れて始めて芽をふき始めた。而して解剖刀のやうな日頃の批判力は鉛のやうに鈍つてしまつた。葉子の母が暴力では及ばないのを悟つて、すかしつなだめつ、良人までを道具につかつたり、木部の尊信する牧師を方便にしたりして、あらん限りの智力を搾つた懷柔策も、何んの甲斐もなく、冷靜な思慮深い

作戦計畫を根氣よく續ければ續ける程、葉子は木部を後ろにかばひながら、健氣にもか弱い女の手一つで戰つた。而して木部の全身全靈を爪の先き想ひの果てまで自分のものにしなければ、死んでも死ねない様子が見えたので、母もとうとう我を折つた。而して五ヶ月の恐ろしい試験の後に、両親の立ち會はない小さな結婚の式が、秋の或る午後、木部の下宿の間で執り行はれた。而して母に對する勝利の分捕品として、木部は葉子一人のものとなつた。

木部はすぐ葉山に小さな隠れ家の様な家を見付け出して、二人は陸まじくそこに移り住む事になつた。葉子の戀は然しながらそろ／＼と冷え始めるのに二週間以上を要しなかつた。彼女は競争すべからぬ關係の競争者に對して見事に勝利を得てしまつた。日清戰爭といふもの光も太陽が西に沈む度毎に減じて行つた。それはそれとして一番葉子を失望させたのは同棲後始めて男といふものの裏を返して見た事だつた。葉子を確實に占領したといふ意識に裏書きされた木部は、今までおぐびにも葉子に見えなかつた女々しい弱點を露骨に現はし始めた。後ろから見た木部は葉子には取り所のない平凡な氣の弱い精力の足りない男に過ぎなかつた。筆一本握る事もせずに朝から晩まで葉子に膠着し、感傷的な癖に恐ろしく我儘で、今日々々の生活にさへ事缺きながら、萬事を葉子の肩になげかけてそれが當然な事でもあるやうな鈍感なお坊ちやん染みた生活のしかたが葉子の鋭い神經をい

らいらさせ出した。始めの中は葉子もそれを木部の詩人らしい無邪氣さからだと思つて見た。而してせつ／＼と世話女房らしく切り廻す事に興味をつないで見た。然し心の底の恐ろしく物質的な葉子にどうしてこんな辛抱がいつまでも續かうぞ。結婚前までは葉子の方から迫つて見たにも係はらず、崇高と見えるまでに極端な潔癖屋だつた彼であつたのに、思ひもかけぬ貧乏な陋劣な情慾の持主で、而かもその欲求を貧弱な體質で表はさうとするのに喰はすと、葉子は今まで自分でも氣が附かずにゐた自分を鏡で見せつけられたやうな不快を感じずにはゐられなかつた。夕食を済ますと葉子はいつでも不満と失望とでいら／＼しながら夜を迎へねばならなかつた。木部の葉子に對する愛着が募れば募る程、葉子は一生が暗くなりまさるやうに思つた。かうして死ぬために生れて來たのではない筈だ。さう葉子はくさ／＼しながら思ひ始めた。その心持が又木部に響いた。木部は段々監視の眼を以て葉子の一舉一動を注意するやうになつて來た。同棲してから半ヶ月もたない中に、木部はやゝもすると高壓的に葉子の自由を束縛するやうな態度を取るやうになつた。木部の愛情は骨に沁みる程知り抜かれたが、鈍つてゐた葉子の批判力は又磨きをかけられた。その鋭くなつた批判力で見ると、自分と似寄つた姿なり性格なりを木部に見出すといふ事は、自然が巧妙な皮肉をやつてゐるやうなものだつた。自分もあんな事を想ひ、あんな事を云ふのかと

思ふと、葉子の自尊心は思ふ存分に傷けられた。外の原因もある。然しこれだけで十分だつた。二人が一緒になつてから二ヶ月目に、葉子は突然失踪して、父の親友で、所謂物事によく解る高山といふ醫者の病室に閉ぢ籠らしてもらつて、三日ばかりは食ふ物も食はずに、淺ましくも男の爲めに眼のくらんだ自分の不覺を泣き悔んだ。本部が狂氣のやうになつて、やうやく葉子の隠れ場所を見つけて會ひに來た時は、葉子は冷靜な態度でしら／＼しく面會した。而して「あなたの將來のお爲めに屹度なりませんか」と何氣なげに云つて退けた。本部がその言葉に骨を刺すやうな諷刺を見出しかねてゐるのを見ると、葉子は白く擱つた美しい齒を見せて聲を出して笑つた。

葉子と本部との間柄はこんな他愛もない場面を區切りにしてはかなくも破れてしまつた。本部はあらんかぎりの手段を用ゐて、なだめたり、すかしたり、強迫までして見たが、總ては全く無益だつた。一旦本部から離れた葉子の心は、何者も觸れた事のない處女のそのやうにさへ見えた。

それから普通の期間を過ぎて葉子は本部の子を分娩したが、固よりその事を本部に知らせなかつたばかりでなく、母にさへ或る他の男によつて生んだ子だと告白した。實際葉子はその後母にその告白を信じさす程の生活を敢てゐたのだつた。然し母は眼敏くもその赤坊に本部の面影を採り出して、基督信徒にあるまじき惡

意をこの憐れな赤坊に加へようとした。赤坊は女中部屋に運ばれたまゝ、祖母の膝には一度も乗らなかつた。意地の弱い葉子の父だけは孫の可愛さからそつと赤坊を葉子の乳母の家に引き取るやうにしてやつた。而してそのみじめな赤坊は乳母の手一つに育てられて定子といふ六歳の童女になつた。

その後葉子の父は死んだ。母も死んだ。本部は葉子と別れてから、狂瀾のやうな生活に身を任せた。衆議院議員の候補に立つても見たり、純文學に指を染めても見たり、旅僧のやうな放浪生活も送つたり、妻を持ち子を成し、酒に耽り、雜誌の發行も企てた。而してその總てに一不滿を感ずるばかりだつた。而して葉子が久し振りで汽車の中で出遇つた今は、妻子を里に返してしまつて、或る由緒ある堂上華族の寄食者となつて、これと云つてする仕事もなく、胸の中だけでは色々な空想を浮べたり消したりして、兎角回想に耽り易い日送りをしてゐる時だつた。

### 三

その本部の眼は執念くもつきまつはつた。然し葉子はそつちを見向かうともしなかつた。而して二等の切符でもかまはないから何故一等に乘らなかつたのだらう。かう云ふ事が屹度あると思つたからこそ、乗り込む時もさう云はうとしたのだに、氣が利かないつちやないと思ふと、近頃になく起きぬけから訝え／＼してゐた

氣分が、沈みかけた秋の日のやうに陰つたり滅つたりし出して、冷たい血がポンプにでもかけられたやうに腦の透間といふ透間をかたく閉ざした。たまらなくなつて向ひの窓から景色でも見ようとする、そこにはシェードが下ろしてあつて、例の四十三四の男が厚い唇をゆるく開けたまゝで、馬鹿な顔をしながらまじ／＼と葉子を見やつてゐた。葉子はむ／＼としてその男の額から鼻にかけたあたりを、遠慮もなく發矢と眼で鞭つた。商人は、本當に鞭たれた人が泣き出す前にするやうに、笑ふやうな、はにかんだやうな、不思議な顔のゆがめ方をして、さすがに顔を背けてしまつた。その意氣地のない様子がまた葉子の心をいら／＼させた。右に眼を移せば三四人先きに本部がゐた。その鋭い小さな眼は依然として葉子を見守つてゐた。葉子は震へを覺えるばかりに激昂した神經を兩手に集めて、その兩手を握り合せて膝の上のハンケチの包みを押へながら、下駄の先きをおつと見入つてしまつた。今は車内の人々が申し合せて侮辱でもしてゐるやうに葉子には思へた。古藤が隣座にゐるのさへ、一種の苦痛だつた。その眞想的な無邪氣な態度が、葉子の内部的經驗や苦悶と少しも縁が續いてゐないで、二人の間には金輪實際理解が成り立ち得ないと思ふと、彼女は特別に毛色の變つた自分の境界に、そつと窺ひ寄らうとする探偵をこの青年に見出すやうに思つて、その五分刈りにした地蔵頭までが顧みるにも足りない木の屑か何んぞのやうに見えた。

瘦せた木部の小さい輝いた眼は、依然として葉子を見詰めてゐた。

何故木部はかほどまで自分を侮辱するのだらう。彼は今でも自分を女とあなどつてゐる。小ぼけな才力を今でも頼んでゐる。女よりも浅ましい熱情を鼻にかけて、今でも自分の運命に差出がましく立ち入らうとしてゐる。あの自信のない臆病な男に自分はさつき媚を見せようとしたのだ。而して彼は自分がこれ程まで誇りを捨てて與へようとした特別の好意を蹴を反へして退けたのだ。

瘦せた木部の小さな眼は依然として葉子を見つめてゐた。

この時突然けたましい笑ひ聲が、何か熱心に話し合つてゐた二人の中年の紳士の口から起つた。その笑ひ聲と葉子と何んの關係もない事は葉子にも分り切つてゐた。然し彼女はそれを聞くと、もう慙にも我慢がし切れなくなつた。而して右の手を深々と帶の間にさし込んだまゝ立ち上りざま、

「汽車に酔つたんでせうかしらん、頭痛がするの」

と捨ててやうに古藤に云ひ残して、いきなり線戸を開けてデッキに出た。

た。その顔には心配さうな驚きの色が明らさまに現はれてゐた。

「ひどく痛むんですか」

「えゝ可なりひどく」

と答へたが面倒だと思つて、

「いゝから這入つてゐて下さい。大袈裟に見えんといやですか……大丈夫危なかりませんとも……」

と云ひ足した。古藤は強ひてとめようとはしなかつた。而して、

「それぢや這入つてゐるが本當に危なう御座んすよ……用があつたら呼んで下さいよ」

とだけ云つて素直に這入つて行つた。

「Simpleton!」

葉子は心の中であつてふやくと、焼き捨てたやうに古藤の事なんぞは忘れてしまつて、手欄に臂をついたまゝ放心して、晩夏の景色をつむ引き締つた空氣に顔をなぶらした。木部の事も思はない。緑や藍や黄色の外、これと云つて輪廓のはつきりした自然の姿も眼に映らない。唯涼しい風が習々と鬢の毛をそよがして通るのを快いと思つてゐた。汽車は目まぐるしい程の快速力で走つてゐた。葉子の心は唯渾沌と暗く固まつた物の周りを飽きる事もなく幾度も／＼左から右に、右から左に廻つてゐた。かうして葉子に取つては永い時間が過ぎ去つたと思はれる頃、突然頭の中を引つ掻きまはすやうな激しい音を立てて、汽車は六郷川の鐵橋を渡り始めた。葉子は思はずぎよつとして夢からさめたやうに前を見ると、釣橋の鐵材が蛛手になつて上を下へと飛び跳るので、葉子は思はずデッキのバンネルに身を退いて、兩袖で顔を抑へて物を念じるやうにした。

さうやつて氣を静めようと眼をつぶつてゐる中に、腕を通し袖を通して木部の顔と殊にその輝く小さな兩眼とがまざ／＼と想像に浮び上つて來た。葉子の神經は磁石に吸ひ寄せられた砂鐵のやうに、堅くこの一つの幻像の上に集注して、車内にあつた時と同様な緊張した恐ろしい状態に返つた。停車場に近づいた汽車は段々と歩度をゆるめてゐた。田圃のこゝかしこに、俗惡な色で塗り立てた大きな廣告看板が連ねて建てあつた。葉子は袖を顔から放して、氣持の悪い幻像を拂ひのけるやうに、一つ／＼その看板を見迎へ見送つてゐた。處々に火が燃えるやうにその看板は眼に映つて木部の姿はまたおぼろになつて行つた。その看板の一つに、長い黒髪を下げた娘が經卷を持つてゐるのがあつた。その胸に書かれた「中將湯」といふ文字を、何氣なしに一字づつ讀み下すと、彼女は突然私生兒の定子の事を思ひ出した。而してその父なる木部の姿は、かゝる亂雑な聯想の中心となつて、又まざ／＼と焼きつくやうに現はれ出した。

その現はれ出した木部の顔を、謂はば心の中の眼で見つめてゐる中に、段々とその鼻の下から髭が消え失せて行つて、輝く眸の色は優しい肉感的な温みを持ち出して來た。汽車は徐々に進行をゆるめてゐた。稍、荒れ始めた三十男の皮

膚の光澤は、神經的な青年の蒼白い膚の色となつて、黒く光つた軟かい頭の毛が際立つて白い額を撫でてゐる。それさへがはつきり見え始めた。列車は既に川崎停車場のプラットフォームに這入つて來た。葉子の頭の中では、汽車が止り切る前に仕事をし遂さねばならぬといふ風に、今見たばかりの木部の姿がどん／＼若やいで行つた。而して列車が動かなくなつた時、葉子はその人の傍にでもゐるやうに恍惚とした顔付で、思はず識らず左手を上げて——小指をやさしく折り曲げて——軟かい髪の後れ毛をかき上げてゐた。これは葉子が人の注意を牽かうとする時にはいつでもする姿態である。

この時、線戸がけたましく開いたと思ふと、中から二三人の乗客がどや／＼と現はれ出て來た。

而かもその最後から、涼しい色合のインパネスを羽織つた木部が續くのを感じて、葉子の心臓は思はずはつと處女の血を盛つたやうに時めいた。木部が葉子の前まで來てすれ／＼にその側を通り抜けようとした時、二人の眼はもう一度しみ／＼と出遇つた。木部の眼は好意を込めた微笑に浸されて、葉子の出やうによつては、直ぐにも物を云ひ出しさうに唇さへ震へてゐた。葉子も今まで續けてゐた回想の情力に引かれて、思はず微笑みかけたのであつたが、その瞬間燕返しに、見も知りもせぬ路傍の人に與へるやうな、冷刻な驕慢な光をその眸から射出したので、木部の微笑は哀れにも枝を離れた枯葉の

やうに、二人の間を空しくひらめいて消えてしまつた。葉子は木部のあわて方を見ると、車内で彼から受けた侮辱に可なり小氣味よく酬い得たといふ誇りを感じて、胸の中がやゝすが／＼しくなつた。木部は搜せたその右肩を癖のやうに怒らしながら、急ぎ足に調歩して改札口の所に近づいたが、切符を懷中から出す爲めに立ち止つた時、深い悲しみの色を眉の間に漲らなから、振り返つて、つと葉子の横顔に眼を注いだ。葉子はそれを知りながら固より侮蔑の一瞥をも與へなかつた。

木部が改札口を出て姿が隠れさうとした時、今度は葉子の眼がぢつとその後姿を逐ひかけた。木部が見えなくなつた後も、葉子の視線はそこを離れようとはしなかつた。而してその眼には淋しく涙がたまつてゐた。

「又會ふ事があるだらうか」

葉子はそよるに不思議な悲哀を覺えながら心の中でさう云つてゐたのだつた。

## 四

列車が川崎驛を發すると、葉子はまた手欄に寄りかゝりながら木部の事を色々と思ひめぐらした。稍々色づいた田圃の先きに松並木が見えて、その間から低く海の光る、平凡な五十三次風な景色が、電柱で句讀を打ちながら、空洞のやうな葉子の眼の前で閉ぢたり開いたりした。赤蜻蛉も飛びかはす時節で、その群れが、燦石から打ち出される火花のやうに、赤い印象を眼

の底に残して亂れあつた。何時見ても新開地じみて見える神奈川を過ぎて、汽車が横濱の停車場に近づいた頃には、八時を過ぎた太陽の光が、紅葉坂の櫻並木を黄色く見せる程に暑く照らしてゐた。

煤煙で眞黒にすゝけた煉瓦壁の蔭に汽車が停ると、中から一番先きに出て來たのは、右手にかのオリヅ色の包物を持つた古藤だつた。葉子はパラソルを杖に弱々しくデッキを降りて、古藤に助けられながら改札口を出たが、ゆるゆる歩いてゐる間に乗客は先きを越してしまつて、二人は一番あとになつてゐた。客を取りおくれた十四五人の停車場附きの車夫が、待合部屋の前にかたまりながら、やつれて見える葉子に眼をつけて何かと噂し合ふのが二人の耳にも這入つた。「むすめ」「らしやめん」といふやうな言葉さへそのはしたない言葉の中には交つてゐた。開港場のがさつな卑しい調子は、すぐ葉子の神經にびり／＼と感じて來た。

何しろ葉子は早く落ち付く所を見付け出したかつた。古藤は停車場の前方の川添ひにある休憩所まで走つて行つて見たが、歸つて來ると、ふりふりして、驛夫あがりらしい茶店の主人は古藤の書生つぽ姿をいかにも馬鹿にしたやうな斷り方をしたといつた。二人は仕方なくうるさく付き纏はる車夫を追ひ拂ひながら、潮の香の漂つた濁つた小さな運河を渡つて、或る狭い穢い町の中程にある一軒の小さな旅人宿に這入つて行つた。横濱といふ所には似もつかぬやうな古

風な外構へで、美濃紙のくすぶり返つた置行燈には太い筆付で相模屋と書いてあつた。葉子は何んとかその行燈に興味を牽かれてしまつてゐた。悪戯好きなその心は、嘉永頃の浦賀にでもあればありさうなこの旅館屋に足を休めるのを恐ろしく面白く思つた。店にしゃがんで、番頭と何か話してゐるあばずれたやうな女中までが眼に留つた。而して葉子が體よく物を言はうとしてゐると、古藤がいきなり取りかまはない調子で、

「何處か静かな部屋に案内して下さい」

と無愛想に先きを越してしまつた。

「へい／＼、どうぞこちらへ」

女中は二人をまじ／＼と見やりながら、客の前もかまはず、番頭と眼を見合せて、蔑んだらしい笑ひを漏らして案内に立つた。

ぎし／＼と板ぎしみのする眞黒な狭い階子段を上つて、西に突き當つた六疊程の狭い部屋に案内して、突つ立つたまゝで荒つぽく二人を不思議さうに女中は見比べるのだつた。油じみた襟元を思ひ出させるやうな、西に出窓のある薄汚い部屋の中を女中をひつくるめて睨み廻しながら古藤は、

「外部よりひどい……何處か他所にしませうか」

と葉子を見返つた。葉子はそれには耳も假さずに、思慮深い貴女のやうな物腰で女中の方に向いて云つた。

「隣室も明いてゐますか……さう。夜までは何

處も明いてゐる。……さう。お前さんがこゝの世話をしておいで？……なら餘の部屋も序に見せておもらひませうか知らん」

女中はもう葉子には輕蔑の色は見せなかつた。而して心得顔に次ぎの部屋との間の襖を開ける間に、葉子は手早く大きな銀貨を紙に包んで、「少し加減が悪いし、又色々お世話になるだらうから」

と云ひながら、それを女中に渡した。而してずつと並んだ五つの部屋を一つ／＼見て廻つて、掛軸、花瓶、團扇さし、小屏風、机と云ふやうなものを、自分の好みに任せてあてがはれた部屋のとすつかり取りかへて、隅から隅まで綺麗に掃除をさせた。而して古藤を正座に据ゑて小ざつぱりした座布団に坐ると、につこり微笑みながら、

「是れなら半日位我慢が出来ませう」

と云つた。

「僕はどんな所でも平氣なんですがね」

古藤はかう答へて、葉子の微笑を追ひながら安心したらしく、

「氣分はもうなほりましたね」

と附け加へた。

「えゝ」

と葉子は何げなく微笑を續けようとしたが、その瞬間につと思ひ返して肩をひそめた。葉子には假病を續ける必要があつたのをつい忘れようとしたのだつた。それで、

「ですけれどもまだこんななんですの。こら動

悸が」

と云ひながら、地味な風通の單衣物の中にかくれた華やかな襦袢の袖をひらめかして、右手を力なげに前に出した。而してそれと同時に呼吸をぐ／＼とつめて、心臓と覺しいあたりに烈しく力をこめた。古藤はすき通るやうに白い手頸を暫く撫で廻してゐたが、脈所に探りあてると急に驚いて眼を見張つた。

「如何したんです、え、ひどく不規則ぢやありませんか……痛むのは頭ばかりですか」

「いゝえ、お腹も痛みはじめたんですの」

「どんな風に」

「ぎ／＼と錐でももむやうに……よくこれがあるんで困つてしまふんですのよ」

古藤は靜かに葉子の手を離して、大きな眼で深々と葉子をみつめた。

「醫者を呼ばなくつても我慢が出来ますか」

葉子は苦しげに微笑んで見せた。

「あなただつたら屹度出来ないでせうよ。……慣れつこですから堪へて見ますわ。その代りあなた永田さん……永田さん、ね、郵船會社の支店長の……あすこに行つて船の切符の事を相談して来ていたぢけないでせうか。御迷惑ですわね。それでもそんな事で御願ひしちやあ……」

宜う御座んす、私、車でそろ／＼行きますから」

古藤は、女といふものはこれ程の健康の變調をよくもかうまで我慢をするものだと思ふやうな顔をして、勿論自分が行つて見ると云ひ張つた。

實はその日、葉子は身のまはりの小道具や化粧品を調べ、米國行きの船の切符を買ふ爲めに古藤を連れてこゝに來たのだつた。葉子はその頃既に米國にゐる或る若い學士と許嫁の間柄になつてゐた。新橋で車夫が若奥様と呼んだのも、この事が出入りのものの間に公然と知れたつてゐたからの事だつた。

それは葉子が私生子を設けてから暫く後の事だつた。或る冬の夜、葉子の母の親佐が何かの用でその良人の書齋に行かうと階子段を昇りかけると、上から小間使がまづいぐらに駆け下りて來て、危く親佐に打つ突からうとしてその側をすりぬけながら、何か意味の分らない事を早口に云つて走り去つた。その島田橋や帶の亂れた後姿が、嘲弄の言葉のやうに眼を打つと、親佐は唇を噛みしめたが、足音だけはしどやかに階子段を上つて、いつもに似ず書齋の戸の前に立ち止つて、しはぶきを一つして、それから規則正しく間をおいて三度戸をノックした。

かう云ふ事があつてから五日とたぬ中に、葉子の家庭即ち早月家は砂の上の塔のやうに脆くも崩れてしまつた。親佐は殊に冷靜な底氣味悪い態度で夫婦の別居を主張した。而して日頃の柔和に似ず、傷ついた牡牛のやうに元通りの生活を恢復しようとししめく良人や、中に這入つて色々云ひなさうとした親類達の言葉を、きつぱりと却けてしまつて、良人を釘店のだつた廣い住宅にたつた一人残したまふ、葉子ともに三人の娘を連れて、親佐は仙臺に立ち退いてし

まつた。本部の友人等が葉子の不人情を怒つて、本部のとめるのも聽かずに、社會から葬つてしまへといひしめいてゐるのを葉子は聞き知つてゐたから、普段ならば一も二もなく父を庇つて母に楯をつくべき所を、素直に母のする通りになつて、葉子は母と共に仙臺に埋もれに行つた。母は母で、自分の家庭から葉子のやうな娘の出した事を、出来るだけ世間に知られまいとした。女子教育とか、家庭の薰陶とかいふ事を折ある毎に口にしてゐた親佐は、その言葉に對して虚偽と云ふ利子を拂はねばならなかつた。一方を採み消す爲めには一方にどんと火の手を擧げる必要がある。早月母子が東京を去ると間もなく、或る新聞は早月ドクトルの女性に關するふしだらを書き立てて、それにつけての親佐の苦心と貞操とを吹聴した序に、親佐が東京を去るやうになつたのは、熱烈な信仰から來る義憤と、愛兒を父の悪感化から救はうとする母らしい努力に基くものだ。その爲めに彼女は基督教婦人同盟の副會長といふ顯要な位置さへ投げ棄てたのだと書き添へた。

仙臺に於ける早月親佐は暫くの間は深く沈黙を守つてゐたが、見る／＼周圍に人を集めて華しく活動をはじめた。その客間は若い信者や、慈善家や、藝術家達のサロンとなつて、そこからはリバイバルや、慈善市や、音楽會といふやうなものゝ形を取つて生れ出た。殊に親佐が仙臺支部長として働き出した基督教婦人同盟の運動は、その當時野火のやうな勢で全國に擴がり始

めた赤十字社の勢力にもさ／＼劣らない程の盛況を呈した。知事令夫人も、名だる素封家の奥さん達もその集會には列席した。而して三ヶ年の月日は早月親佐を仙臺には無くてはならぬ名物の一つにしてしまつた。性質が母親と何處か似過ぎてゐる爲めか、似たやうに見えて一調子違つてゐる爲めか、それとも自分を慎しむ爲めであつたか、はたの人に判らなかつたが、現に角葉子はそんな華かな雰囲気包まれないが、不思議な程沈黙を守つて、碌々暗れの座などには姿を現はさないでゐた。それにも拘らず親佐の客間に吸ひ寄せられる若い人々の多數は葉子に吸ひ寄せられてゐるのだつた。葉子の控目なしをらしい様子がいやが上にも人の噂を引く種となつて、葉子といふ名は、多才で、情緒の細やかな、美しい薄命兒を誰にでも思ひ起させた。彼女の立ちすぐれた眉目形は花柳の人達さへ羨しがられた。而して色々な風聞が、清教徒風に質素な早月の住居の周圍を霞のやうに取り捲き始めた。

突然小さな仙臺市は雷にでも打たれたやうに或る朝の新聞記事に注意を向けた。それはその新聞の商賣敵である或る新聞の社主であり主筆である某が、親佐と葉子との二人に同時に慇懃を通じてゐるといふ、全紙に互つた不倫極まる記事だつた。誰も意外なやうな顔をしなから心の中ではそれを信じようとした。

この日髪の毛の濃い、口の大きい、色白な一人の青年を乗せた人力車が、仙臺の町中を忙し



く駆け廻つたのを注意した人は恐ろしくなかつたらうが、その青年は名を木村といつて、日頃から快活な活動好きな人として知られた男で、その熱心な奔走の結果、翌日の新聞紙の廣告欄には、二段抜きで、知事令夫人以下十四五名の貴婦人の連名で、早月親佐の冤罪が雪がれる事になつた。この稀有の大要緊な廣告が又小さな仙臺の市中をどよめき渡らした。然し木村の熱心も口辯も葉子の名を廣告の中に入れる事は出来なかつた。

こんな騒ぎが持ち上つてから早月親佐の仙臺に於ける今までの聲望は急になくなつてしまつた。その頃丁度東京に居残つてゐた早月が病氣に罹つて藥に親しむ身となつたので、それをしほに親佐は子供を連れて仙臺を切り上げる事になつた。

木村はその後すぐ早月母子を追つて東京に出て來た。而して毎日入りびたるやうに早月家に出入して、殊に親佐の氣に入るやうになつた。親佐が病氣になつて危篤に陥つた時、木村は一生の願ひとして葉子との結婚を申し出た。親佐はやはり母だつた。死期を前に控へて、一番氣にせずにはゐられないものは、葉子の將來だつた。木村ならばあの我儘な、男を男とも思はぬ葉子に仕へるやうにして行く事が出来ると思つた。而して基督教婦人同盟の會長をしてゐる五十川女史に後事を託して死んだ。この五十川女史のまあ／＼と云ふやうな不思議な曖昧な切盛りで、木村は、何處か不確實ではあるが、兎も角葉子

を妻とし得る保障を握つたのだつた。

## 五

郵船會社の永田は夕方でなければ會社から退けまいと云ふので、葉子は宿屋に西洋物店のものを呼んで、必要な買物をする事になつた。古藤はそんなら其處らをほつて、歩いて來ると云つて、例の麥稈帽子を帽子掛から取つて立ち上つた。葉子は思ひ出したやうに肩越しに振り返つて、

「あなた先刻バラソルは骨が五本のがいゝと仰有つてね」

と云つた。古藤は冷淡な調子で、

「さういつたやうでしたか」

と答へながら、何か他の事でも考へてゐるらしかつた。

「まあそんなにとほけて……何故五本のお好き？」

「僕が好きと云ふんぢやないけれども、あなたは何んでも人と違つたものが好きなんだと思つたんですよ」

「何處までも人をおからかひなさる……ひどい事……行つていらつしやいまいし」

と情を迎へるやうに云つて向き直つてしまつた。古藤が縁側に出ると又突然呼びとめた。障子にはつぎ、立姿をうつしたまゝ、

「何んです」

と云つて古藤は立ち戻る様子がなかつた。葉子は惡戯者らしい笑ひを口のあたりに浮べてゐ

た。

「あなたは木村と學校が同じでいらしつたのね」

「さうですよ、彼は木村の……木村君の方が二つも上でしたがね」

「あなたはあの人を如何お思ひになつて」

丸で少女のやうな無邪氣な調子だつた。古藤は微笑んだらしい語氣で、

「そんな事はもうあなたの方が委しい筈ぢやありませんか……心のいゝ活動家ですよ」

「あなたは？」

葉子はぽんと高飛車に出た。而して、やりとしながらがつくりと顔を上向きにはねて、床の間の一蝶のひどい偽物を見やつてゐた。古藤が咄嗟の返事に窮して、少しむづとした様子で答へ澁つてゐるのを見て取ると、葉子は今度は聲の調子を落して、如何にも頼りないといふ風に、

「日盛りは暑いから何處ぞでお休みなさいましね。……なるだけ早く歸つて來て下さいまし。もしかして、病氣でも悪くなると、こんな所で心細う御座んすから……よくつて」

古藤は何か平凡な返事をして、縁板を踏みならしながら出て行つてしまつた。

朝の中だけからつと破つたやうに晴れ渡つてゐた空は、午後から曇り始めて、眞白な雲が太陽の面を撫でて通る度毎に暑氣は薄れ、空一面が灰色にかき曇る頃には、廣寒く思ふほどに初秋の氣候は激變してゐた。時雨らしく照つたり降つたりしてゐた雨の脚も、やがてじめ／＼